

苗焼けに注意

播種後、緑化期までは急激な温度上昇による“焼け”に注意をしてください。無加温出芽で被覆物（ベタ張り）をかけている時に、一時的な強い日差しでもハウス内温度はかなり上昇し、苗焼けを引き起こす場合があります。床土内部に温度計を設置し、床土温度が30℃を超えないように温度管理します。また、新しい屋根ビニールは日光透過率が高くハウス内温度が上昇しやすいため、新調した方は外気温が低くてもハウス内温度（床土温度）には注意が必要です。

初期分けつを確保する圃場準備～「ワキ」を抑える作業～

近年管内では、初期分けつ不足を発端とした穂数不足による収量低下が課題となっています。その原因のひとつが「異常還元（ワキ）」です。前年作のワラが多いうえ、昨年発生した「ひこばえ」も加わり大量の未熟有機物が、今春の異常還元の原因になるものと思われます。さらに、気温は高いと予報されているため、田植え後間もなく強いワキの出る可能性があります。今からできる対策を確実に実施し、異常還元を軽減させながら分けつを確保していくことが必要です。



乾田化促進

耕起前までに停滞水を排水、透水性を確保。土中に酸素を供給し、乾土効果発現を期待。

土づくり資材

ケイ酸が多くあることで根の活力維持が図られ、異常還元（ワキ）の影響軽減が期待できます。

耕深目標15cm

根域を広く確保。固く締まった土をほぐすこと。排水不良田では練り込まないように注意。

飽水管理

飽水管理（ほうすいかんり）は土壌の酸化状態を保つ水管理です。従来の間断かん水では田面を露出しないように常時湛水としていましたが、飽水管理では、一時的に田面を露出させる期間を設けて土中に酸素を供給します。土壌の湿潤状態と酸化状態を保つ一挙両得の水管理です。除草剤散布後7日以降から実施します。分けつ期、幼穂形成期以降、登熟期で行えます。

今年も雑草は生えます

昨年、どこの田んぼにどの雑草が発生したか覚えていますか？除草剤は多くの種類に効果があるものと、効果が限定的なものがあります。用意した除草剤があなたの田んぼに生えている雑草に効果があるのか今一度確認してください。

- ◎初期剤では代かきから7日以内、一発剤では代かきから14日以内の散布が効果的です。
- ◎除草剤に記載されている「ノビエ○葉期まで」という表記より-0.5葉を目安に早めの余裕を持った除草剤散布をしてください。
- ◎田植え期間が長期に渡る場合は「除草剤散布日」を必ず設定し作業計画に組み込むようにしてください。除草剤散布は「タイミング」です！

除草剤散布適期例と雑草葉齢進展の目安

●除草剤散布は雑草が見える前に散布することが基本です。
 ●気温状況により、葉齢進展速度が早まります。

雑草葉齢進展の目安	代かき後日数	防除可能葉齢																				
		0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
ノビエ		散布適期を逃さない									1.0葉	1.5葉	2.0葉	2.5葉	3.0葉							
ホタルイ															1.0葉	2.0葉	3.0葉					
除草剤散布体系	初期剤＋一発剤	代かきと移植・除草剤の間はできるだけ短く！				初期除草剤				一発処理除草剤												
	一発剤のみ	代かきと移植・除草剤の間はできるだけ短く！				一発処理除草剤																

土づくり、健苗育成が豊作への稲作の第一歩 豊作に向けて基本技術と異常気象対策の積極的導入を

令和6年産の稲作が始まりました。今年も異常気象が続いており、昨年以上に基本技術を確実に実践すること、異常気象対策技術を導入していくことが重要です。今月は、土づくりと健苗育成を重点的に実践していきましょう。

今月の栽培技術留意点

健苗育成

健苗を田植えすることで、気温や除草剤に負けずに素早い活着と初期分けつが確保されます。そのため、育苗管理が重要です。

床土温度30℃以内厳守
寒さよりも焼かない温度管理
カビが出にくい換気徹底
こまめなハウス内温度管理が病害防ぐ

土づくり① 耕 深

土中の養水分を吸収し、異常気象下でも実りを下支えしてくれる根の活力を維持する土づくりをしましょう。

耕起前に排水性・透水性を改善する
耕深15cm目標
耕起は土塊を残しながら土をほぐす

土づくり② ケ イ 酸

ケイ酸は登熟歩合向上だけでなく高温や低温、日照不足でも根の活力維持をしてくれ、稲の生育をサポートしてくれます。管内水田土壌ではケイ酸が不足している圃場が大多数です。これからの稲づくりは高温対策を取り入れていかなければなりません。少量からでも継続的にケイ酸を投入することで異常気象に対応しながら収量品質の安定化に繋がります。

ケイ酸資材基本投入量
ケイカル(粒) 100kg/10a
シリカ未来 60kg/10a
けい酸加里 40kg/10a
1袋からでも入れていきましょう!

土づくり③ 異常還元対策

土中の未熟有機物が多いと気温上昇とともに分解が始まり、ガス発生や土中が酸欠状態となり稲の生育に影響を及ぼします。今年、前年作のワラが多く、高温が予想されていることから、異常還元（ワキ）発生の危険性が高まっています。

耕起までに乾田化を進める、
ケイ酸肥料等の散布、
土中に酸素を供給する水管理

安心のネットワーク **NOSAI** から

農機具共済 《春期》加入運動実施中！

●1台当たり2,000万円まで加入OK！
●買い替え報告はお忘れなく。

稼動前に **※点検と加入で** ゆとりの農作業を…



健苗育成が高品質米づくりの第一歩

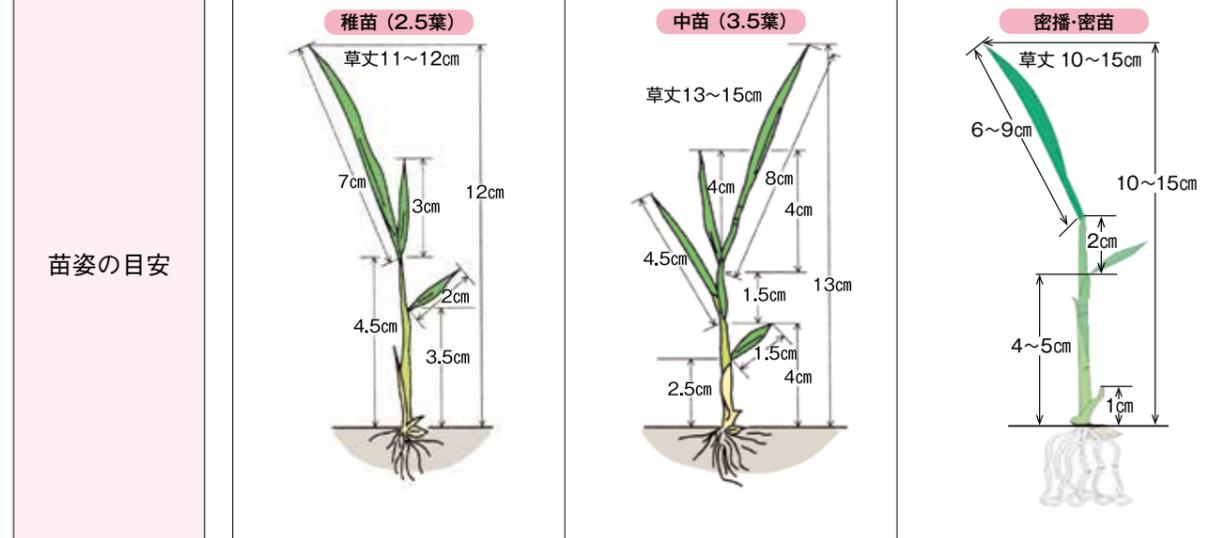
田植え後、素早く活着し初期生育のスタートダッシュを切るためには、健苗育成が欠かせません。目標とする苗質を確認して、健康で元気な苗となるように管理をしてください。

無加温出芽で被覆物（ベタ張り）除去後や育苗器から出芽苗をハウスに並べた後は、覆土の持ち上がりを落とす程度のかん水をします。ハウスへの苗並べが夕方の場合、翌朝にかん水します。また、露出した種籾があったら見えなくなる程度に覆土します。

育苗期間のかん水と床土温の差が少ない日の出から午前10時頃までの間にたっぷりとかん水します。夕方に行くと床土温度を下げるうえ、過湿になるため控えます。温度差によるストレスを与えないようにします。

出芽後の苗は極端な温度差にも弱く、当日の天気予報を確認しながらハウス内の温度管理を徹底させてください。日中は本田作業等でハウス管理が難しい場合は、朝から開放管理としてください。

種 類	稚 苗	中 苗	密播・密苗
育苗期間	20～25日	35～40日	14～21日
葉 数	2.5葉	3.5葉	2.3葉
草 丈	10～13cm	13～15cm	10～15cm
必要箱数 (10aあたり)	70株……19箱 60株……16箱 50株……14箱	70株……22箱 60株……19箱 50株……16箱	70株……8箱 60株……7箱 50株……6箱
播 種 量	乾 籾：144 g／箱 催芽籾：172 g／箱	乾 籾：80 g／箱 催芽籾：96 g／箱	乾 籾：300 g／箱 催芽籾：360 g／箱
出 芽	無加温出芽（ベタ置き）の場合 週間天気予報を確認し、気温傾向に合わせた適切な被覆資材を選択すること。床土温30℃を超えないように温度管理を。		
	加温出芽の場合 出芽長を伸ばしすぎないように。出芽長が長いとその後の生育も徒長気味に生育しやすくなります。蒸気出芽の場合、水槽の水が無くならないように確認を。		
第1葉鞘長	3.0～3.5cm	2.5cm程度	4.0～5.0cm
緑 化 期 ※中苗は播種後 20日間	昼：20～25℃ 夜間：10～12℃		
かん水の ポイント	苗が若いうちは、体が小さく、水を吸う力も弱いので過剰なかん水は避けること。多湿になると酸欠になり、立枯病を誘発させてしまう。苗の大きさに合わせて朝イチにしっかりとかん水させること。		
硬 化 期 ※田植え1週間 前頃から	昼：開放 夜間：5℃以上		
追 肥	追肥をしっかりと行い、元気な苗を植えましょう。 ※右ページ参照		



大きく育った苗に弁当持たせて素早い活着

田植えの1週間前に弁当肥として追肥を行います。苗が栄養不足状態で田植えをすると活着（発根）に時間がかかってしまい初期生育に影響します。田植え時期に低温や曇天が続くような場合は必ず追肥をしてやりませう。苗をよく観察して葉数や葉色に応じた追肥を行ってください。

育苗期追肥の目安（箱当たり窒素g）

葉 齢	稚 苗	中 苗
1.5 葉 期	1 g	—
2.0 葉 期	—	1 g
3.0 葉 期	—	1 g

育苗追肥資材例

資 材 名	現物量	窒素成分	水 量
液 肥 2 号	10ml	1.0g	1,000ml
サイコー12号	8 g	1.0g	—

※サイコー12号は散布後にかん水を行います。

苗いもち防除を確実に実施

いもち病菌は、乾燥状態の稲わらや籾殻に付着し越冬します。育苗ハウス周辺に潜んでいるいもち病菌が苗に移ることで発生を助長しますので、周辺の清掃を行い、種子消毒、育苗期防除を組み合わせる清潔な環境で作業を行い、本田持ち込みを阻止してください。WCSや飼料用米も必ず苗いもち防除をしてください。

薬 品 名	防 除 時 期	使用 基 準	使用回数	備 考	タフブロック併用
ベンレート水和剤	播種時～播種14日頃	500倍液 500ml／箱	1回	かん注	×
ビームゾル	緑化始期	500倍液 500ml／箱	1回	かん注	○

※ベンレート水和剤の苗いもち防除時は使用回数1回までです。 ※ビームゾルはWCSへの登録がないため、ベンレートを使用する。

もみ枯細菌病対策

もみ枯細菌病対策は、種子消毒とエコフィットを使用しましょう。また、病原菌増殖に適した環境を作ってしまうと発生が多くなるので、薬剤防除とあわせて、そうした環境を作らないようにしてください。

もみ枯細菌病を増やさない環境

- 厚播きはしない。
- 出芽温度32℃を超えない。
- 被覆期間を過剰に長くしない。
- 出芽後の再被覆はしない。
- 緑化期以降は25℃以上にならないようにする。
- 過湿にしない。

エコフィット適用作物と使用方法

作物名	希釈倍率	使用液量	散布時期	使用回数	使用方法
水 稻	100倍	—	催芽時	1回	24時間浸種
水 稻 育苗箱	10倍	1箱あたり 500ml	播種時		灌 注
		1箱あたり 50ml		散 布	

育苗期における主な苗立枯病

病名	ピシウム菌(別名:ムレ苗)	
症状	出芽後、地際が水浸状に褐変、急激にしおれ枯死、カビ発生無。	
原因	温度管理とかん水方法(急激な温度差、日中のかん水)。	
対策	タチガレエースMかナエファインの使用、日中のかん水はくみ置き水を使用し温度差を解消。	

病名	フザリウム菌	
症状	発芽直後～、根・地際部褐変、黄化枯死。地際部白又は紅色の粉状カビ。	
原因	過度の乾湿、昼間30℃以上夜間10℃以下の管理。	
対策	タチガレエースMかナエファインの使用、温度管理、肥料切れ注意。	

病名	リゾプス菌	
症状	種子層・床面に白いカビ。出芽・生育・根の発育不良。	
原因	過度の乾湿、出芽期間32℃以上の管理、育苗資材の不衛生。	
対策	育苗箱・出芽器の洗浄、施設清掃、播種時の水量確認。播種時ダコニール1000かダコレート水和剤、ナエファインの使用。出芽期間の温度管理。	

病名	もみ枯細菌病	
症状	新葉基部と葉鞘部が白色～淡黄色→腐敗枯死、新葉は容易に抜ける。坪枯れ症状。	
原因	循環催芽で発生拡大、出芽温度が32℃以上、被覆資材の二度掛け、育苗資材の不衛生。	
対策	エコフィットの使用、発生確認した場合、発病箱をハウス外へ隔離する。	